

# 初代の砂防課長 赤木正雄博士

内務省土木局に第三技術課が新設された、而して初代の課長が赤木正雄博士で、第三課の仕事が全国の砂防工事を司るのであるから申分のない適材を適所に据えたわけである。

赤木博士は大正三年に東大を出た林學士であるが、其當時我國の砂防工事の重要性を最も深く認めてゐた沖野博士の下に内務省大阪土木出張所に入り、滋賀縣の山の中に技術生活の第一歩を踏出した。次いで徳島縣の溪流工事に貴重な體驗を経て、大正十二年奥國ウキンに留學してアルプス山系の發達せる溪流工事に就て研究調査を重ね十四年に歸朝するや、内務技師として本省第一技術課に入り全國の砂防計畫に關與する事になつた。一方農林技師を兼ね又京都帝大の講師を託され、又砂防に關する著述も多い。

昭和九年十二月赤木氏不斷の研究は遂に溪流に關する論文により農學博士の學位を得て益々其權威を認められ、十一年十一月勅任技師に任ぜられた。此間赤木博士の設計になる砂防堰堤は數多いのであるが、特殊設計になる代表的なものとして著名なるは手取川、立山、上高地等の砂防工事である。

本年七月初旬神戸市の豪雨は無砂防の背後山地より恐るべき慘害を市内に及ぼして天下の人心を寒からしめたのである。それが動機となつたわけでもあるまいが、多年の懸案解決の一步として急遽八月になつて第三技術課が新設されたのである。而して内務省は主腦會議を開いて十五年繼續の豫算三億圓の砂防計畫を決定したのである。

支那事變下の非常時局に於ては此の賢明なる豫算も容易の事では通らないであらうが、末次内相初め

關係官民の認識も甚大であるから、着々實現の運びに至る事と信ぜられる。

治水の根源は砂防にある事は遠く我國の先覺的技術家の認めてゐた處であつた、野中兼山、河村瑞軒等騒り、明治初期に於ても沖野博士等は極力砂防を強調したのである。其一例は明治十四年の淀川改修費六萬圓の内四萬圓は砂防費に充當されたのにも見てもわかる。

爾來數十年間所謂我國の政黨政治華やかなりし時代には、人家もない山中に工事を施工する事を嫌い、徒らに河川下流の施設にのみ力を注いだのであつた。

昭和十二年の二・二六事件は悲しむべき出来事ではあつたが、之を轉機として我國の内外機構に一大革新を來するとなつた、而して我が土木の一分野としての砂防計畫も眞に治水の使命に活躍する時期が復活したのである。

今日の我國の砂防技術は恐らく世界に冠たるものである、神戸市の如きも數年前に砂防の計畫は出来てゐたのである、若しそれを實行してゐたならば今回の慘事と損害は完全に避け得たのであらう。

赤木博士は曰く、「事の根本を突き留めるのが私の趣味である」と之が砂防の眞髓であらう、人間の居ない山の中に幾億の金を投ぜんとする爲には全く災害の生ずる根本を突留め、利用厚生となるべき根本を突き留めなければならぬ。

光頭にして簡明なる赤木博士は溪流と俱に生き溪流と俱に行ふ事すでに二十五年、如何なる荒廢したる山溪も赤木博士の前には從順ならざるを得ないであらう、寔に砂防道の達人と云ふべきである。

